

第17回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時：平成29年8月4日（月）13：30～16：30

2. 場所：学術総合センター 20階 実習室1

3. 出席者：
（委員）

小山 憲司	中央大学 文学部 教授
相原 雪乃	北海道大学附属図書館 管理課長
佐藤 初美	東北大学附属図書館 情報管理課長
米澤 誠	京都大学附属図書館 事務部長
粟谷 禎子	公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原 修	立教大学図書館 利用支援課 課長
近藤 茂生	立命館大学図書館 学術情報部 次長
呑海 沙織	筑波大学 図書館情報メディア系 教授
佐藤 義則	東北学院大学 文学部 教授
大向 一輝	国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授
小野 亘	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
吉田 幸苗	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（陪席）

飯野 勝則	佛教大学図書館 専門員
三角 太郎	筑波大学 学術情報部 アカデミックサポート課長
江川 和子	国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長

（事務局）

片岡 真	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長（CiNii/新CAT 担当）
阪口 幸治	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長（CAT/ILL 担当）
古橋 英枝	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係員（CAT/ILL 担当）

<配付資料>

委員名簿

1. 第 16 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨
- 2-1. 平成 29 年度国立情報学研究所オープンフォーラム開催報告
- 2-2. NII オープンフォーラム 2017 アンケート
3. VIAF への正式参加について（報告）
4. 電子リソースデータ共有作業部会（平成 29 年度活動報告）
5. NACSIS-CAT 検討作業部会（平成 29 年度活動報告）
- 6-1. 「これからの学術情報システム構築検討委員会」意見交換会（仮）の企画案
- 6-2-1. 「これからの学術情報システム構築検討委員会」意見交換会について（通知）
（国公立協力委員会委員長宛）
- 6-2-2. 「これからの学術情報システム構築検討委員会」意見交換会について（通知）
（目録所在情報サービス参加館宛）
- 6-2-3. 「これからの学術情報システム構築検討委員会」意見交換会チラシ案
- 7-1. 平成 29 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動計画
- 7-2. 第 15 回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨（抜粋）

参考資料

1. これからの学術情報システム構築検討委員会規程
2. 平成 29 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動報告
3. 電子リソースデータ共有作業部会（平成 29 年度活動計画）
4. NACSIS-CAT 検討作業部会（平成 29 年度活動計画）
5. 意見交換会用 Web サイト
6. 意見交換会申込フォーム（札幌会場版）
7. 意見交換会ご意見・ご質問事前受付フォーム

4. 議事：

議事に先立ち、事務局より 4/24 付のメール審議において、「これからの学術情報システム構築検討委員会規程」に基づき、互選により委員長として小山委員を選出した旨の報告があった。

（1）前回（第 16 回）委員会の議事要旨確認

メール審議を経て 2/10 付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

（2）NII オープンフォーラムの開催報告（報告）

事務局より、資料 2-1 及び 2-2 に基づいて報告があった。

（3）VIAF への正式参加（報告）

事務局より資料 3 に基づいて報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- 著者名典拠レコードの重要性を広報すると説明があったが、具体的にどういった内容か。
 - 現在は著者名典拠の登録が任意になっているので、積極的に作成いただきたいという点と、TYPE 等に不備があると VIAF 内での名寄せに影響があるため、データ整備にご協力いただきたい、という 2 点である。
- VIAF 内の NACSIS-CAT 著者名典拠データの更新はどのように実施されるのか。
 - NACSIS-CAT の公開用データとして毎年作成している全件データを送付し、毎回全件更新を実施する予定である。
 - 全件更新が VIAF における標準的な更新単位か。
 - ✧ Agreement では月次更新が望ましい旨の記載があるが、年 1 回以上であればよいことになっているため、CAT は年次で実施する。

(4) 電子リソースデータ共有作業部会活動報告（報告）

飯野電子リソースデータ共有作業部会主査より、資料 4 に基づいて報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- (イ) の①の「本年度は 5 機関の増加を見ており」とはどういった意味か。
 - 今年度になってから現時点で 5 機関増えたという意味である。
- (ウ) の①の「Open Letter」に関するページが ERDB-JP のサイトで発見しづらい。
 - 来月末までにサイトリニューアルの予定があるため、ページ構成も調整し、善処する予定である。
- 「Open Letter」に対して何か具体的な活動は発生しているのか。
 - Ex Libris 社から回答があり、SFX 版 Knowledge Base への持続的なデータ提供について進める予定である。
 - 逆に Ex Libris 社から提供を受ける情報やデータはあるのか。
 - 現時点で具体的な話はない。
 - 世界中のナレッジベースを持ち寄って共有できるようになればよいのではないか。
- Jisc Collections が OCLC と連携して National Bibliographic Knowledge Base の構築を開始した。フランスの ABES も同様に開始している。各国の状況を調査した上で、今後の連携を模索したほうがよいのではないか。
 - その方向で検討と調査を進めたい。

(5) NACSIS-CAT 検討作業部会活動報告（報告）

三角 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 5 に基づいて報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- これから開催する意見交換会は実施方針の内容を理解していただく場なのか、みなさんから意見をいただいて吸収する場なのか。
 - 実施方針と実装の間にはまだ埋めなければならないものがある。いただいたご意見は実装の検討時に参考にする。
- 平成 30 年度にガイドライン公開とあるが間に合うのか。
 - 実施方針に掲載した計画に沿って粛々と進める。
- 実装までに埋め合わせていく作業について、今後の見通しは立っているのか。
 - システム的にはソフトランディングを前提に検討している。一方で、運用面は従来の考え方を大きく変える点があるため、担当者の目録作成に対する意識を変えていただかなければならない。どうやって浸透させていくのが今後の課題だと考えている。
- これまで委員会として方針や枠組みについての検討を進めてきたが、現在は実装レベルの話に移行しつつある。委員会と作業部会でどのように議論を整理すべきか。
 - 実装レベルの検討は作業部会で進めればよいと考えているが、NACSIS-CATにとどまらないグランドデザインは委員会で描いていただきたい。
- 現場の関心は「ローカルシステムにどんな影響があるのか。どんな対応をしなければならないのか」に尽きる。そういった問いに答えていくことが安心感につながるのではないか。
- システム面については、現時点で NACSIS-CAT に接続している図書館システムベンダーの確認作業を実施した。一方的に NII が情報を出してベンダーが対応する、ではなくコミュニケーションをとりながら進めていきたい。
 - システムレベルで解決できないものが運用レベルでの対応になるので、NII と作業部会で連携して進めてほしい。
 - 作る側の意識は変わりつつあるが、どう見えることになるのか、どこまでローカルシステムで対応しなければならないのかがまだ不明確のようである。一方で冊子体に対する OPAC のことだけを考えていくのか、電子リソースも含めた全体の中でどのように見えるのか考えていくべきなのか等も課題である。
- 作業部会には RDA や新 NCR に合わせるのか、独自ルールで進めるのかを検討していただきたい。
 - 現時点では各データが実情としてどういった内容になっているのかを確認した上で、落としどころを探している。
 - 例えば参照 MARC に関しては、納入時点のデータフォーマットについて作成元に相談する、といったことを検討してもよいのではないか。

(6)「これからの学術情報システム構築検討委員会」意見交換会(仮)の企画検討(審議)事務局より、資料 6-1~6-2-3 に基づいて企画内容について説明があった。

審議の結果、イベント名称を「これからの学術情報システムに関する意見交換会」とし、8月7日より委員会 Web サイトに掲載し、国公私立大学図書館協会・協議会のメーリングリストや NACSIS-CAT/ILL 参加機関のメーリングリストでも広報することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- 参加申込とは別に事前にご意見・ご質問をいただくフォームを準備しており、集まった内容を意見交換の時間の議論の対象とする予定である。
- NACSIS-CAT について、基本方針策定時の意見招請のときに特に名寄せに対する関心が高かったので、今回の会で何か出せるとよいのではないかと。
- あらかじめ公開資料を読んで、意見を持って参加する人と、情報を求めて参加する人と、参加者側にも様々な層がいることが予想される。そういったばらつきをどのように埋めるのか考えておく必要がある。
- 意見交換会の開催目的について再度確認したい。
 - 本委員会および各作業部会における活動状況を知ってもらうとともに、今後検討を進めるための材料として、現場が感じている疑問や不安について共有する場にするのが目的である。
 - 本委員会以前からの検討経緯も含めて、改めてなぜ現在のような議論をしているのかを共有する場でもある。

(7) 平成 29 年度活動について（審議）

委員長より、資料 7-1～7-2 に基づいて今年度の活動内容の具体化に際して、過去の検討経緯について説明があった。

審議の結果、今年度にとどまらず、今後の委員会の活動の方向性について、今回の議論の論点整理をした文書を作成し、次回も継続して議論することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- 2つの作業部会の活動の連携を委員会として考えるべきなのではないか。
- 目録担当者については、もっと全般的にメタデータに関わっていくような人員の再配置が必要だと感じているが、実際にはできていない。
 - 本委員会が目指すべき像を打ち出せば、各機関で役立てることができるのか。
 - まず利用イメージを作って、それに向かって業務をどう変えていけばよいのかを示せれば、変わっていくのではないかと。
 - その利用イメージのためのインフラをどう構築していくのか、その中での NACSIS-CAT や ERDB-JP の位置づけを考えていく必要がある。
 - ◇ Google などが出てきて、我々がやれるところが狭くなっている。やれるところをきっちりやっけて行く、という方向で、ERDB-JP などに取り組んでいると理解している。全体をカバーすることは無理なので、うまく切り分けて、大学図書館界としてやるべきことを全体の共通認識に持っていくところが重要である。
 - ◇ CAT 軽量化も、外部に任せられるところは任せるという発想で検討を進めてきた。
- ILL をどうやって縮小していくかが課題である。CAT に関しては、当初の ILL のた

めの総合目録という位置づけが大幅に変わってきている。

- ILL の対象として、洋雑誌はピークの 4 分の 1、和雑誌は約 6 割まで減っている。電子ジャーナルの大規模な契約解除があっても ILL の件数は増えておらず、紙の ILL に戻ることはないと考えるのが妥当である。NDL との協力も検討すべきである。
- NDL の図書館向けデジタル化資料送信サービスでは約 180 万件が公開されている。仮に自館の所蔵は 120 万件でも、デジタルサービスも含めれば提供可能な資料は 300 万件あることになる。これらをどう発見させ、提供するか、という視点が重要である。
 - 自動化書庫を入れて資料を溜めるより、日本全体で一コレクションという発想でもよいのではないか。
 - 国文研でもデジタル化を進めている。資料のデジタル化について、NDL、国文研、大学図書館等、これに関わる機関の役割分担を明確にしていく必要があるのではないか。
 - 大学図書館側に、所蔵からアクセスへという考え方の転換が必要ではないか。
 - 日本版 HathiTrust ができたらよいのではないか。
 - ◇ NDL デジタルコレクションは国内サービスという観点では決して少なくない件数である。
 - ◇ NACSIS-CAT のデータをメタデータとして生かすことも考えられる。
 - ◇ そういった状況で国内のメタデータに対して「どこが作ったか」は関係ない。
 - 海外の図書館員からはディスカバリーサービスでの日本語資料の見つけづらさについて度々指摘がある。電子化の後にはメタデータの流通についても検討が必要である。
- 現場の業務が NACSIS-CAT/ILL に最適化されすぎており、脱却のためには何らかの方針が必要である。図書館とはこういうもの、という固定観念があるのではないか。
 - 目録業務を委託して 20 年以上が経過すると、指針を出しても現場がついてこないのではないかという不安もある。NACSIS-CAT はシステムへの習熟が人材育成にもつながっていた。意識改革を考えるのであれば、人材育成の仕組みも一緒に考えていく必要がある。答申のような文書が必要ではないか。
- 最終目標は統合的発見とアクセスだと思うが、アクセスにつなげるという意味では検索システムの高度化だけではなく人がネットワークを介してつなぐ、ということも考えられる。
- 新しい人材育成という観点では、ERDB-JP を利用したらよいのではないか。自機関が関わっている部分はきちんとデータ整備をやりましょう、といった全国キャンペーンにするのはどうか。
 - 縦割りで考えずに枠を超えて整理してワークフローを組み直す必要がある。
- Alma の検証目的をもう少し具体的に見せたほうがよいのではないか。共同導入を見据えた既存システムとの比較なのか、各機能についての要・不要を見極めてオリジナルシステムの開発に役立てるのか、といった目的が示されると、受け止める側の理解につながるのではないか。
 - ライセンス管理や予算管理をいかにコンソーシアムとして連携して行うのが

検証目的である。JUSTICE コンソーシアム提案書をシステム内でテンプレート化し、各機関にデータ共有後、必要に応じてカスタマイズするという作業がどのように実現可能なのか検証している。

以上